能登半島地震からの復興のモニュメントとなる広場のデザイン

ー 能登有料道路別所岳サービスエリア拡張整備計画および実施設計監修 ー

鍔　　隆　弘

2007年3月25日に、石川県輪島市沖の日本海で発生した地震は、輪島市門前町を中心に能登半島全体にわたり、建物倒壊や土砂崩れなどの被害を与えた。能登有料道路では、徳田大津ICと穴水IC間に数カ所にわたり道路の崩落が生じた。その復旧に際し、別所岳サービスエリアは復旧工事の基地となり、駐車場に隣接する山は復旧用の土取場として活用された。七尾湾を望めることのできたこの山は、元の地形を想像し難いほどに造成された一方、道路は、当初の予想より遥かに短い期間で復旧された。

駐車場に隣接する土取場跡の様子(2008年5月)

石川県は2008年4月、県内の5校の空間デザイン系の大学及び専門学校に呼びかけ、能登半島地震からの復興のモニュメントとなる広場の基本計画のデザイン案を募るコンペティションを行った。提案の条件は、地震からの復興モニュメントとなる形態を持つこと、石川県の重要眺望地点として七尾湾や能登島を望むことのできる展望台を含むこと、建設費が1.5億円ほどであること、であった。金沢美術工芸大学からは、大学院デザイン科環境デザインコースに所属する学生と私がチームを結成し、提案を行った。参加した学生は、山本周(2年)、石黒智章(1年)、横田言芳（1年）の3名である。同年7月の審査の結果、金沢美術工芸大学案が最優秀案に選定された。

選定案の内容は次のようなものである。

「山の記憶、それぞれの時間」
1: Concept／デザインの考え方

タイトルボード

この計画では、敷地に展開するシークエンスによって、震災と復興を後世に伝えるメモリアルとなる広場を提案する。

震災によって私たちは、失われて二度と元に戻らないものの大切さ、回復してゆくものの力強さを改めて認識した。これらを、この広場を訪れる人々に感じていただくメモリアルとしてのシークエンスを作り出す。震災の復興のために切られた山の地形を残すこと、造成地に回復してゆく植生の遷移を見せること、育まれてきた美しい眺望景観を更に美しく見せることを主な要素として、この地域の存在、震

災によって失われたもの、能登のこれからの展望を見せるものである。

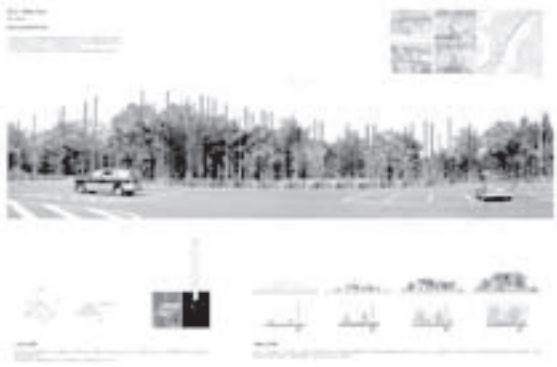
シークエンスは人が体験する空間だけでなく、用意する要素の重層によって、人の持つ十年単位の時間、植生が育って行く百年単位の時間、大地の持つ億年単位の時間を同時に感じさせるものとなる。

2: Program／デザインする空間の形

メモリアルとしてのシークエンスの考え方

シークエンスを作り出すための空間として、「回復」、「メモリアル」、「眺望」をテーマとした3つのゾーンを設定する。それぞれのゾーンでは、大地、動植物、人為の要素がそれぞれのバランスで扱われ、これらの層状の重なりがゾーンのテーマに沿った雰囲気を創出する。

2-1: バッファゾーン／山と樹林を取り戻すために



バッファゾーンの形態

本敷地は震災以前、周辺と同様自然環境豊かな落葉樹林主体の山であった。震災復興のための土砂採取により、頂上部分を失った。以前の形を、人々の意識に取り戻すことが、周辺の自然環境を取り戻すことであると同時に、震災に対するメモリアルとしての存在になると考える。

また、他のゾーンと駐車場空間とのバッファとして位置づけ、全体の雰囲気の強調を図るものである。

a_柱による再現

元々存在していた山の地形を想像させる柱を配置する。柱は震災のモニュメントとしても機能するもので、一辺が300㎜　の直角三角形の断面を持つ。直角の頂点が、すべて震源地の方向へと向いている。

b_樹林による再現

将来的には、草本層、低木層、中木層、高木層の階層構造を持つ、周辺樹林と同様の落葉樹林形成を目指す。元々のボリュームのある緑のイメージを形成する。

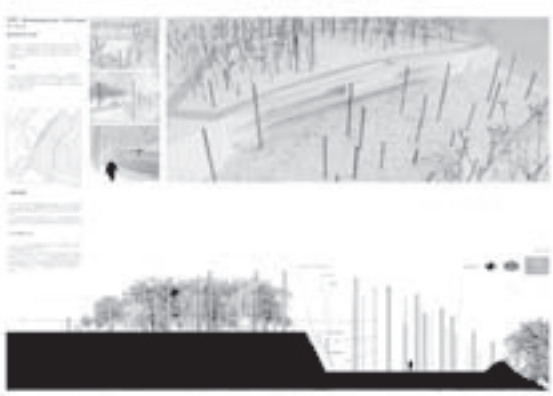
階層構造が発達した樹林は、一部の樹木が倒れるなど穴が開いた場合、下層の樹木や周囲の樹木が樹林の穴を埋める形で育ち、自己修復を行う。樹林自体が復興を隠喩するものとなる。

c_混在

当初は、周辺樹林より採取する実生と幼木による植栽とし、草刈りの管理を行い樹林の形成を行う。樹林の成育過程は、回復を見せるものとして機能する。樹林が形成される頃には、樹林の樹冠の上に柱が点在する眺めを作り出す。この樹林は、様々な動植物にニッチを提供するものとなっている。

2-2: モニュメンタルエリア＋デッキスペース／震災を忘れないために

土砂採取によって最終的に抉り採られた敷地内の凹地は、崖形態を若干緩やかにする程度の造成とし、あえて現状に近い形態とする。復興に必要とした土の量を体感できるその場所は、震災を風化しないための場所である。



モニュメンタルエリアの形態

a_柱

バッファゾーンと同様に、元の山の地形の一部を見せるよう柱を配置する。柱は、すべて震源地の方向へと向いている。柱群は、地域の赤い土に似た瓦砂利を背景に､上空を飛ぶ航空機からも視認できる。

b_高木の育成

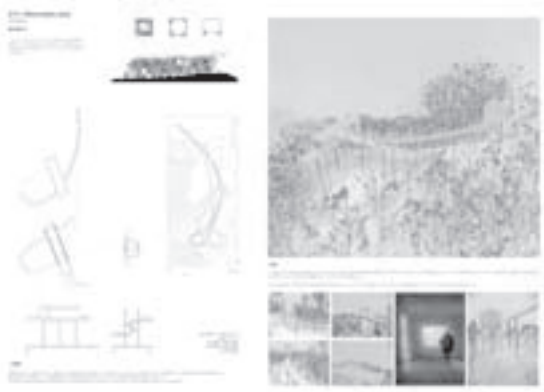
敷地全体は震災以前同様に自然環境を形成することを目指す。その中で、モニュメンタルエリアでは植栽は一切行なわない。エリア全体に瓦粉砕砂利を敷き、震源地の方向に向けられた柱が点在するだけの場所とする。ここでは、徐々に植生に覆われてゆくものとなるが、高木種を残して草刈りを行う。将来的には、高木種と柱が混在しながら、それぞれの存在感が強調される見通しの利く空間とする。

c_デッキスペース

バッファゾーンとの境界に細長いデッキスペースを用意し、震災および復興記録の展示スペースとする。また、柱の立つモニュメンタルエリアを異なる高さから眺める場所となる。上ではバッファゾーンとの境界の崖の高さから、運ばれた土砂の行き先を想像したり、下では崖に大地の力を感じたり、人々は囲繞された中で思いを深めることとなる。

2-3: 展望台エリア／震災を越えて

シークエンスのクライマックスとして、内浦を一望できる展望台を用意する。元の山の地盤より若干低い盛土の上に、三角柱が立ち、展望台が据えられる。盛土部分は、バッファゾーンと同じく、落葉樹林の生育を図る。



展望台エリアの形態

a_展望台へのアプローチ

震災の出来事を心に刻むように、取り戻された森の中を、木の高さや光、温度を感じながら歩く。スロープの途中の二カ所には、上下吹き抜けのボックスに囲まれた階段がある。あえの風の吹きあがるボックスの中を昇ると、まわりに生育する落葉樹林の異なる階層に出る。樹林の様々な表情を感じながら、歩みを上へと進める。

b_展望台

落葉樹林を抜けると、展望台に行き着く。展望台は、あえの風を取り込み吹き流すよう、筒状の形をしている。中からは、展望台の床、壁、天井を額縁として、複雑な汀線を持つ内浦の景色が広がる。展望台の先の方へ足を進めると、この地域の樹林から流れ出す栄養塩が海を豊かにするように、足下に広がる樹林の樹冠が、海面へと続いている。

周りを振り返ると、震災後に復旧された有料道路の斜面が目に入る。更に歩いてきた方を眺めると、モニュメンタルエリアの柱群が見え、すべての柱が震源地に向いている事に気付く。

c_観月

この場所からは、内浦にのぼる月を望むことができる。2007年3月25日の朝 、地震の起きたその数分後、月の出は見えなかったものの、地震とは関係なくいつものように月が昇った。人々の記憶に訴えるよう、ここでは、内浦の月の出をメモリアルの一

つと位置づける。展望台は月の出の方位に合わせて真東へ向ける。内浦にのぼる月を眺めながら、これからのことを考える場となる。

昇る月を眺めたあと、展望台を降り、暗い静かな樹林の中を戻る。モニュメンタルエリアまで歩いて戻る頃には、月の明かりが、柱と大地を更に強くつなぐように、林立する柱の影を大地に刻んでいる。

2008年、夏より実施設計が始まり、施工を含め監修を行った。実施設計においてコンペティション選定案から大きく変わった点は、バッファゾーン及びモニュメンタルエリアにおいて、元の山の形を復元してみせるような木製の柱群が作られなかった点、モニュメンタルエリアのデッキ状の休憩施設が作られなかった点、展望台にエレベータを付設された点である。変更は有ったものの、復興のモニュメントとなるシークエンスは、コンペティションにおける提案通りに実現された。

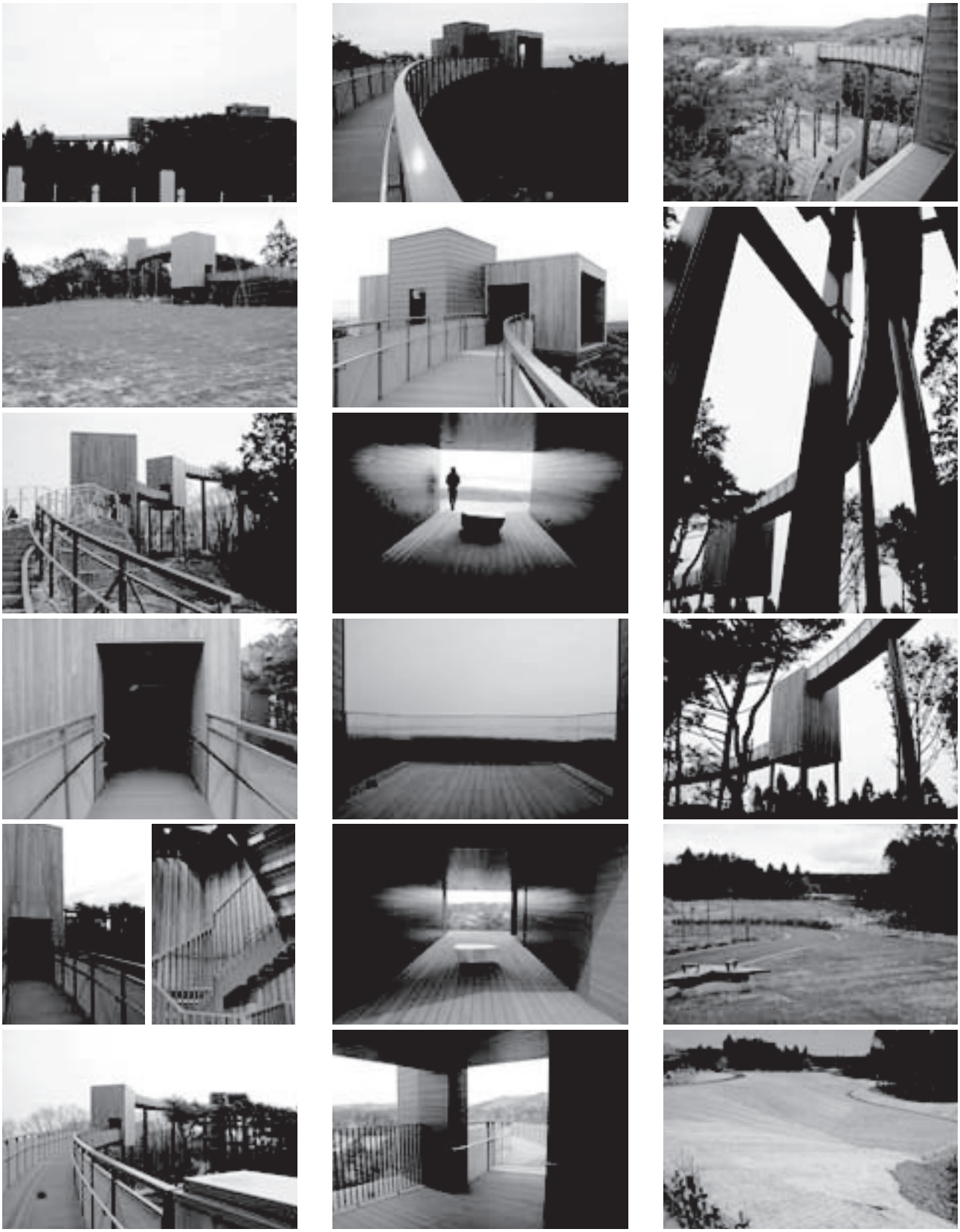
木製の柱群が作られなかった理由は、次のようである。選定案では樹林がある程度の高さに育つと思われる20～30年後に、木製の柱は朽ちてしまうことを期待するものであった。人工の柱よるボリュームが自然のボリュームに置き換わることを狙ったものである。しかしながら、朽ちる柱が訪れる人に対して危険性があること、公共で整備する施設が朽ちて失われることを前提に作るのでは納税者に対する説得性が無いことが、施工主である石川県から指摘された。柱群は構造を見直し、さらに全体のボリュームを少なくしながら、展望台から駐車場方向を眺めた際に、列柱が並んで震源方向を示す配置で設計された。シークエンスの中では、展望台から七尾湾方向への眺望を見た後、駐車場へ戻る際に、一つ目のボックスを出た時に見える形となった。施工は次の整備段階に行われる予定である。

モニュメンタルエリアのデッキ状の休憩施設は、その位置と施工費の再検討により、位置と形態を変更し、柱群と同様に次の整備段階で作られる予定である。

展望台のエレベータは、展望台へのアクセスをバリアフリーとする目的で付設された。選定案では展望台までの往復の道行きが階段を含んでいるため、その不都合の解消が求められた。実施設計では選定案が持っていた展望台屋上部分とそこから地上へ降りる長い階段が不要となり、構造物の形態が単純なものとなった。有料道路から望むことのできる遠景において、箱の形の展望台が樹林の上に浮かぶ、すっきりとしたものとなった。

樹林の復元は、広場のデザインの中心となる部分であり、広場空間を特徴づける重要な背景である。地元で育成した苗木植栽により、なるべく早期に樹林を形成する形とした。周囲の樹林と同じような高さの樹林が形成されるまでに20～30年がかかると予想される。また、管理上の労力を軽減するため、雑草の生育をある程度抑制するマルチングを施工した。マルチング材は、分解されて土壌の養分となる藁を用いた。園路沿いにおいては、わずかな本数であるが、現地の既存樹林内から移植できるものもあり、シークエンスの中のアクセントとして活用した。

この広場の展望台は、県の景観計画の中で重要眺望地点として位置づけられている。現在、現地においては、展望施設とそこからの眺望だけが取り上げられた案内がされている。しかしながら今後、樹林が生育してゆくに連れ、本来の意図された変化の大きなシークエンスが充実することとなる。まずは20年後の姿を楽しみにしている。今回、コンペティションへの応募から、実施設計の監修、施工の監修にかかわることができた。その中で、売店の整備や、眺望説明板など、施設整備にかかわる様々な関係部署から、本来の形を阻害するものの設置を求められることといろいろあった。監修の手を離れてしまったこれからも、地震からの復興のメモリアルであるシークエンスが成熟するような整備がなされるよう、見守って行きたい。

（つば・たかひろ　環境デザイン）

（2010年10月29日受理）